

辛かったが、やって良かった 遺体の搜索と収容

福島県新地町消防団

副団長

角田 正悦 (58歳)

消防団歴 36年 (会社員)



新地町の概要と被災状況

福島県新地町は、福島県の浜通りに位置し、北は宮城県山元町、西は宮城県丸森町、南は相馬市に接し、東は太平洋に接している。町域は東西1.2km、南北6.5kmの台形状で、総面積は46.35km²、人口は8,076人（平成24年年3月1日現在）である。町の主産業は、農・漁業であり、釣師浜漁港には、多種の水産物が水揚げされ、首都圏方面に出荷されている。

東京電力と東北電力の共同出資による相馬共同火力発電株式会社新地発電所は、1号機が平成6年、2号機が平成7年に営業運転を開始し、石炭火力としては日本有数の出力（100万kW、2基）の火力発電所である。

新地町消防団は4分団で、消防団員数は319名、そのうち12名が女性消防団員である。ポンプ車等18台で活動している。

東日本大地震では、新地町の谷地小屋で6強を観測した。地震から約50分後の15時40分、大津波が襲来した。町を襲った津波の高さは、10mを超えたとも計測されている。津波は、海岸線を越えて相馬・亘理線、JR常磐線を押し流し、国道6号まで遡上し、一部で国道6号を越えた。津波の浸水域は、町の面積の約5分の1にあたる約9km²に及び15行政区30地区のうち11地区が浸水し、500戸以上の家屋が被害を受けた。津波により死者

115人、負傷者3人、住家被害は全壊439世帯、半壊127世帯の被害が発生している。

揺れた後、会社から役場へ

消防団員は319名で、役場の職員も多いが、仕事を優先している。3月11日は、勤め先の車の部品製造会社で、NC旋盤をしていた。縦揺れがすごく、停電にはならなかったが自動的に機械は止まり、25人ほどいる従業員は、皆庭に逃げた。建物や電信柱も揺れ、石碑も倒れた。「ついに来たな」と思った。揺れが収まってから、社長にすぐ「対策本部に行きます」と言って、会社をぬけさせてもらい、自宅に一旦戻り、祖父母と女房の無事を確認した。消防法被を着て、10分かからず町役場2階の災害対策本部（町長室の隣の会議室）に行った。町長はいたが、他にはまだ誰も来ておらず、電話、携帯が不通のため情報は入っていなかった。町からの広報や防災無線は聞こえたようだが、私は車中にいて津波警報を聞いていない。

役場屋上から目撃した津波

役場に着いてから津波が来るという情報を聞き、津波が来る10分前位の15時20分～30分頃、4階屋上に上がった。引き波は肉眼では見えず、15

時36分～40分頃、津波が来襲したのを目撃した。1波目が盛り上がり堤防を越えて、釣師（つるし）浜にあるレストランラハイナが波で浮き、流れたのが見えた。1波目と2波目はあまり時間を置かずに、同じ方向から来たように思う。2波目は覆い被さって、釣師浜の住宅街を一気に飲み込んだ後、瓦礫が黙々と押し流されてきた。新地駅の方は、田んぼなので津波が一気に流れてきて、多分電車も流されたのが2波目かと思う。まっすぐ来た波と北側から来た波があった。

呆然として、「アアアアア」としか声が出ず、副町長、議員など3人ほどがいたが、会話できなかった。津波のしぶきが堤防にあたって10mぐらい上がった写真などがあるが、この辺の津波はすごかった。

どこにも連絡がつかず、地震直後は団長も地元におらず、団の指揮の取りようがなかった。各班で自主的に消防団活動を行い、沿岸地区に行って広報した団員がいた。役場から東の踏切から沿岸地区に向かって「津波が来ますから逃げて下さい」と広報していた団員は、前方に津波が見えて引き返した。海の方に向かっていた車を止めて誘導して戻したが、無視して行った車もあり、消防車がぎりぎりまで逃げる後を津波が追ってきたという状況で、かなり危険だった。津波ハザードマップでは、津波は常磐線で止まるという想定だったが、今回はそれをはるかに越えて川を越え、国道6号を越えた。役場は駐車場半分まで浸水した。

人員が少ない中で行った救助活動

16時過ぎ、津波が収まってから下に降りて、役場近くのスーパーに勤めている娘の安否確認に行く途中で、瓦礫の中から、自分と一般の方の2人で、1人を救助した。意識はあるが、肩掛けをしてようやく歩ける状態で、役場1階に避難させたが、避難者で混雑していた。

消防団員でもあるJR新地駅の駅長は、電車が駅に着いた時に地震が起き、津波が来るというの

で乗客を電車から降ろして避難させた。電車の中に乗り合わせていた警察官2人が乗客を誘導し、本来の避難所である環境改善センターにも津波が来たので、隣の役場1階の会議室に避難させ、その後捜索活動にも協力してくれた。

私たちが救助した人は全身ずぶ濡れで、着ているものをハサミで切って全部脱がせ、保健婦が何かいたので手当てをお願いした。毛布をかぶせたり、救急車の手配を頼んだが、後でまとめて搬送すると言われたそうだ。

日中で火を使っていない時間帯だったので、火災の発生がなく幸いだった。夕方、分署長が「火災情報は一切入っていない」と言っていた。火力発電所の火災については消防署には情報が入ったと思うが、消防団では把握していない。結果的には消えていたが、まわりの人が100人ほど避難し、翌日新地高校に移動していた。

計画では、役場の災害対策本部に団長、副団長、分団長が集まることになっていたが、全然団員は集まっていなかった。役場2階で指揮はとれ、分署長が消防署の無線だけで情報をとっていたが、情報は少なかった。団長、分団長も来て、夜になってあちこちに救助を求めている人がいるという情報が入った。

21時頃、「自宅に取り残されている寝たきりの婦人がいる」という情報が入り、消防職員5名と消防団幹部5、6名で一緒に救出に向かった。懐中電灯と点灯するライトで、瓦礫を乗り越えながら川の土手を下り、担架に女性を乗せた。あぜ道は狭く、ノロがあって滑るうえ、津波の残骸だらけで、パイプやガスボンベを乗り越えながら、役場に向かった。寒くて手が凍えて、担架を持っていられない。10人で運んでいたが、5分もたたずに休んでしまう状態で、交替しながら運んだ。戻って来たのは22時近かったのではないかと。

団長がJAの担当なので、米を供出してもらい、役場で炊き出しのおにぎりが出た。水は断水していたので、給水車が来た。当日は暗くて見えないし、情報も入らないので、夜中の12時に団幹部は自宅待機となり、自宅に車で戻った。自宅の

屋根瓦は崩れ、壁に亀裂が入っていた。茶ダンス、テレビが倒れたぐらいで、わりと被害は少なかった。片づけはしばらくの間、する余裕がなかった。娘が勤めているスーパーは津波に流されたが、娘は小学校1年生の子どもを迎えに行くために帰らせてもらい無事だった。発電機と投光器は準備していたので、水をもらいに行き、灯油ボイラーで風呂を沸かして入った。余震が連続してなかなか寝付けず、朝早く目が覚めた。



消防団による遺体収容作業（撮影／角田副団長）

翌日、遺体捜索活動を申し出る

3月12日に防災行政無線で団員の参集を呼びかけ、翌日は朝7時に66名が集まり、団長も来た。一日活動して、夜には解散した。ゴタゴタしていた。自衛隊は、記録では12日の1時20分に19名到着している。

行方不明といっても、連絡がつかないといった情報が多く、何件か捜索要請があったが、電話が通じず消防無線だけなので、確実な情報ではなく、行って探してもいなかったり、救助を求めているというので、確認したら元気で、確認だけとなったたりした。

遺体が2体～3体あがり、団員1名も津波で亡くなった。沿岸部の埴浜地区の団員で、津波が来るといので自宅に戻り、母親を避難所（コミュニティセンター）に避難させ、もう一度避難誘導に戻る途中、車ごと津波に呑みこまれ、3月12日に田んぼで車の中で発見された。

遺体安置所を「老人いこいの家」に設置した。新地警察署長と相談し、「消防団に遺体を運ばせて欲しい」と申し出た。漂流物、金庫などの回収も話し合った。避難後に戻ったら泥棒に荒らされていたという連絡があり、警察に連絡して調査してもらおうよう指示した。

消防署が担架、町が毛布を準備し、団員用に、ゴム手袋（薄手と厚手2着必ず着用）、マスク（支援物資）、長靴、ペットボトル（水）を準備した。原発の影響を考慮し、戻って来た時は外の水道で

長靴の泥を洗ってから待機所に入るようにした。

3月13日は、消防団員120名～130名が集まった。被災したり、原発1号機が爆発して避難したり、原発に勤めていた団員は集まれなかった。自宅の周りの人も皆避難していた。義理の兄は相馬の人で、原発に勤めている。山形に避難するよう言われたが、捜索しないといけないし「逃げていどころではない」と返事した。地図に円を書くと、自宅のあるところは50km圏で問題ない。

12日はまだ水が引いていなかったのので、線路の上から見てくるよう指示し、13日から本格的に捜索活動した。団長の挨拶後、副団長の私から捜索活動の内容を説明した。担当エリアは事前に相談してあり、訓練指導員とラップ隊と第3分団で、5名一組で小隊を作った。緊急消防援助隊は、神戸市、岐阜県、佐賀県から来ていた。自衛隊の案内と捜索活動を同時に行った。鳥取県警が午後から7台21人入った。被災した集落の住民も10数人ほど手伝ってくれた所もあった。自衛隊や救助隊を案内するのに1名つけた。消防団が遺体を発見すると、トラックに積んでいた毛布にくるんで担架に乗せ、軽トラックに乗せて搬送した。緊急消防援助隊は来たが、救助対象者がいないので引き揚げた。福島県警と応援に来た警察と一緒に捜索に入っていた。

遺体捜索・収容から防犯パトロール

朝7時30分から対策本部会議が始まってその日の打合せをし、8時から捜索活動、11時30分に一旦あがり、また13時00分～16時30分まで捜索活動、17時00分に解散。幹部は18時くらいまで残っていた。行方不明者の捜索活動は約2か月間続き、5月8日に終了した。この間、4月30日と5月1日に一斉捜索（ローラー作戦）を行った。自衛隊や警察、消防と1m間隔で並んで一斉捜索した。遺体搬送に全面的に協力したが、一番苦労した。自衛隊、警察が遺体を発見すると、無線で本部に連絡が入り、地図上のグリッド線で「A—〇番で発見」というのを地図で確認し、道路ルートなどを決めて、待機している班に出動をお願いする。5人一組で軽トラ1台、担架、スコップ、毛布2枚を持参し現場へ向かう。遺体発見場所から、消防団が出して担架に乗せて搬送するが、遺体発見場所はわかりづらく、水の中で発見した方は、胴長と船を持ってきたが重くて船の上に乗せられず、水の上を引きずりながら道路まで運んだ。

遺体回収のとき、担架に乗せた所で手を合わせ、黙祷してから運んだ。安置所に運ぶまでが消防団の仕事で、警察官が確認、検視し、消防団と本部が発見場所と時間を記録・報告し、発見順に番号をつけた。「老人憩いの家」に搬送したあと、当日中に相馬へ移す。一日10体の時もあった。ほとんど毎日遺体搬送の繰り返しだが、何十名単位で団員は来てくれた。4月後半からはほとんど遺体はあがっていない。

早く家族に戻してあげられたので、捜索・遺体搬送はやってよかった。5月8日の時点で死者92人、行方不明者23人だったのが、現在は死者115人であり、新地は身元確認が早くできたと思う。

金庫、財布、アルバムなど漂流物の回収もした。自衛隊も最初はやらないつもりだったが、やらざるを得ないとやってくれた。ボランティアはたくさん来たが、かなり後になってから、瓦礫の

撤去などを行った。

泥棒が多く発生しているので、昼に捜索活動をし、震災当初から毎晩自分の地区の防犯パトロールをした。ランプをつけて巡回していると、いかにも怪しい人がいた。消防団では捕まえないので、車のナンバーを控えた。軽トラックで行ってガソリンを抜くなどのガソリン泥棒もいた。7月10日に、被災した住宅や民家への連続不審火があった。会社に戻ったのは1～2週間後で、会社の社長も消防団に入っていたので理解はあった。

想定外の事態への団員の全面協力

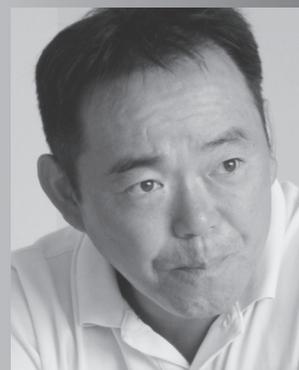
消防団では、宮城県沖地震に備えて10月に総合防災訓練を行い、津波を想定した高台への避難訓練も入っていた。図上訓練DIGも、平成23年1月に行政区長を集めて、各部落ごとに避難場所や避難経路などを書き込み、地図を作ったのがかなり役に立ったと思うが、今回の津波は想定外だった。平成22年のチリ地震津波が小さかったので、今回もそんなに大きくないだろうと、逃げるのが遅れた。防波堤で様子を見ていた人や、一回避難したのに戻った人が被害にあった。今後は避難所を高台に作らざるをえないと思い知らされた。

一番心配したのは放射能だった。団員が法被とマスクだけで毎日捜索に行くのは、本当につらくて、何度も「行くな」と言いたかった。どこの人かわからないが、防護服を着ていた人はいた。防護服は軽いナイロン系のもので、私も着て活動してみたが、かなり蒸れる。雨の時は合羽を着た。濡れるのは怖いので合羽だけは着用させ、普段も下だけ合羽ズボンをはいた。

団員は全面的に協力してくれた。2か月も経つと、遺体は腐敗して臭いがきつく、地面についている所がただれていた。団員には苦労かけたが、団員は嫌だとも弱音を吐く人もいなかった。皆で協力して頑張ろうとやりきれた。こんな事態にさせて、本当、「津波のばかやろう」ですよ。

消防団と共に“頑張っぺ 福島”

福島県新地町消防団
第2分団 第5部 分団長 **小野 茂夫** (44歳)
消防団歴 20年 (製造業)



夢ではなかった現実の大津波

鉄工所の営業から車で帰る途中、宮城県亘理町で揺れを感じ、ただごとではないと思った。女房から「津波6m来る」とメールが入り、それを見て「やばい。すぐ戻らなければ」と思って国道6号を南下した。山元町の消防団に「国道6号より上に上がれ」と呼びかけられ、ここまで津波が来るのかと思いつつ止まった時、車のテレビで仙台空港が津波にのまれていく映像シーンを見た。国道6号から山に登ると小高い丘に人が集まっており、皆が海の方を見ている。私も一緒に見ると、JR坂元駅が津波にのまれる状況が見え、夢かなと思った。坂元でこれなんだから、新地ももう…と思って必死で帰ってきた。

子どもから「尚英中学校に皆無事避難しているから来て」とメールが入り、車に積んである消防法被とヘルメットをかぶり、尚英中学校に向かった。尚英中学校は避難所になっていて、ものすごい人数だった。家族の無事と避難状況を確認してから役場に行った。一帯が停電していた。

役場で、消防団長に状況を「すごい」としか伝えられなかった。直後は災害対策本部が機能していなかったため、避難所で暖と照明をとる段取りをしようと、副団長と各自トラックで中学校に発電機、投光器、ラジオなどを運び、役場にもう1度戻った。

その頃から行方不明者がものすごいぞと思った。役場に来ていた中島部落の救助要請で、21時頃、合計2時間くらいかけて救助した。震災当日はその作業が最後で、明るくなるのを待つという状況だったが、行方不明者を捜してくれと町民の方が心を乱して、役場にかけていた。手をつないで逃げた妻が、途中で手が離れてしまい、助かった夫が「何とかしてくれ！」と叫び、騒いでいた。けれど、暗いので消防団としては捜索できない。何もできなくて辛かった。車の中で夜を明かしたが、尚英中学校と役場を往復するだけで寝る余裕がなかった。どっちもパニックだった。

3月12日：捜索開始

2日目、明るくなって地震・津波の被害の全容がわかってきた。「何んだこれは？」涙すら出ない体験したことのない心境だった。夢じゃないかと思ったが、現実だった。

朝7時前に集合し、団長からの泣き崩れる訓示が印象的だった。分団ごとの捜索エリアを決め、分かれて捜索したが、捜索に入ってからが辛かった。第2分団は役場の前の道路を下りて、中島部落を中心に回るとすぐに遺体を発見した。普段の生活では、人が亡くなった姿は柩の中や病院のベッドの上でしか見たことがない。変わり果てたというか、すごく痛んでいてむごかった。身につけ

ているものはだけて全裸に近い遺体だった。初日は4人の遺体発見した。発見された遺体には毛布にくるみ、リヤカーで遺体安置所まで搬送した。

一番印象的だったのが、同じ団員の妹を発見した時のことだ。釣師部落の団員が、妹の遺体を田んぼの中で発見して、抱きかかえて「何で逃げてくれなかったんだ〜」と大声で叫びながら泣き崩れ、その姿を見る周りの団員も皆、号泣した。「ありがとうございました。見つけてくれて」と、水と泥の田に土下座して皆に謝る。何が悪いのか、どこにもあたりようのない悔しさ、悲しすぎるというか、「辛い」という言葉に尽きる。

朝、消防団控え室を1階角に設けたが、夜になって2階の町長室隣の応接室に移動し、遺体捜索・搬送の方向性、指示をそこで出した。夜解散になって、尚英中学校と行ったり来たりし、階段を上るのもできなくなるぐらい疲れ果てた。1日目は車で往復したが、2日目から原発のことがあって、ガソリンが使いなくなり、歩いて往復した。幹部や私も丸2日寝ておらず、次の日の捜索の時は身体がきつくなった。

3月13日：重機と自衛隊が入った

12日からの目視による捜索で軽い瓦礫はよけたが、重機がないと無理だと3日目にわかり、団長と相談した。つかむタイプの重機が地元にはなかった。自衛隊が入ってくれ、この悲惨な現実をどうしたら良いかと思っていたが、この人たちと一緒にやれば何とかなるかも知れないと心強く思った。次に重機も入って、瓦礫を取り除いて捜索できるようになった。水が残っている田んぼの中にやっと入れ、車に「確認済み」とビニールテープで印をつけた。車の中からも1人の遺体を発見した。余震がひどく、津波襲来の誤報が出た時も、線路から走って逃げた。捜索時にも線路から下には絶対下りるなと団長から指示があった。

自衛隊が本格的に入った4日目からは、消防団



JR新地駅に停車中の電車が大津波にのみ込まれた

は、幹部が災害対策本部に残り、それ以外の団員が、自衛隊が発見して連絡が来ると、担架に遺体を乗せて、軽トラックで遺体安置所に運ぶところを担当した。警察は遺体捜索の人手がなく、なんで警察がやらないんだとは思わなかった。辛いが違和感はなく、消防団がやらねば何のための消防団だと思った。団員には、「被災している人の家族のことを思って捜索にあたるべ」と意思統一したつもりで、辛いけど頑張ってくれと言った。そう思ってやらないとやれないと思ったし、「自分が被災地にいながら、本当に辛い思いをしている人たちに手を差し伸べられる立場にいることに感謝しろ!」と、精神面で言わしてもらった。

消防団は、遺体の確認も依頼された。安置所で確認するが、遺体の損傷がひどかった人などの記憶がたくさん残っている。行方不明者の名簿と照合し、警察官と連携して、身内の方に連絡するところまでやった。それが地元でやっている消防団の強みでもある。遺族がいち早く遺体と対面できるという点で良かったと思う。でも、自分の知っている人の遺体を見るのも辛い。途中で1人、具合が悪くなった団員が出て、これ以上は協力してもらえないと思った。1か月過ぎて、時間がたってくると臭いがひどくて団員も辛くなってきた。

また、途中から不審車両が目立ってきて、警備しながら回った。不審車両のナンバーと車両の特徴をメモして警察に報告した。貴重品は中を見ず、拾った場所を書き留めて警察に届ける。前半は貴重品が多く、金庫の数は多くて重かったが、遺体よりはましだった。

消防団の参集状況

仕事で新地町以外に出ていて、当日は第2分団の団員120名中10名くらいしか集まれなかった。消防団としての意識はあるが、ここに来る余裕がなかった。携帯電話が繋がらず、翌日何時集合という連絡も行き届かなかった。翌朝は100名ほどに、さらに3日目がピークで、震災当時は仕事にならないので最初の1週間はほとんどの団員が来てくれた。

最後の方は自衛隊がかなり入り、団員も次第に仕事が始まってきたので、当番制にした。毎朝6名1班で班を作って班長を決めて、自衛隊から連絡が入ると行ってもらった。2週間ほど水がなかなか引かず、湖のようになり、あぜ道が見える程度で、所々に車や家が見えていた。水が引いてから捜索が本格化してきた。

現場に出たかったが、幹部は残れと言われ、本部に2週間ほど詰めた。捜索中も鉄工所の仕事の電話が入ったが、皆に出てくれと言いながら自分の仕事に行きづらく、どちらかという消防を優先した。仕事を本格的に再開したのは、消防団の捜索が打ち切りになった5月の連休明けからだ。社長は私の父親で、第2分団の幹部だったので消防団活動（使命感）は理解してくれているし、従業員である義兄も副分団長をやっている。鉄工所としての仕事はあるが、仕事の切り回しは難しく、今後はどうなるかわからない。

放射能の影響と消防団活動

延べで2回2時間程度だが、雨が降ると団長の指示で捜索打ち切りにした。線量計もなく、いろいろな情報がメールで交錯し、俺も怖かった。防護服を着たといっただけで大きく防げるわけではない。放射能対策として欲しいものなどまで考えが回らず、いっぱいいっぱいだった。幸い風向きが良かったが、一時新地町にいる団員も逃げて減った。



壊滅状態の新地漁港

私は50kmぐらいだから立場的に逃げられないと家族に言ったが、あの頃の不安感は大きかった。

部落の部長、班長も逃げ、4、5日目は精神的には最悪だった。連続して爆発していた頃は、家族の間でも協議になり、いなくなるとぎくしゃくした。みな事後報告だったので、不安が高まった。油が手に入らなくて逃げられなかった人、避難先がなくて逃げられなかった人がいた。会社では溶接機や車のガソリンはすべて盗まれた。「神に祈るしかない」と思った。放射能の影響は団員にもこれから出てくるかと思う。放射能被害も視野に入れて、活動をかえていかないといけない。

今はこの辺の人は線量計持っていてあまり心配していないが、これだけダメージを受けたうえ、「福島県」というだけで風評被害。これから頑張ろうというのに食べ物は売れず、漁業はひどく、ダブルパンチだ。廃業や解雇という話ばかりで福島県は取り残されるかもしれない。子どもが小さいと仕方がないが、完全に住所移転した人もいる。

地震、津波にどう備えるか

去年津波警報が出た時や震災2日前の3月9日に広報したが、地元の人たちは、避難を呼びかけても、聞く耳持たないって感じだった。広報しながらも、津波ってどんなもんだべと思っていたが、今回大きな津波を経験して、津波は馬鹿にしちゃ絶対いけないぞと思うようになった。1番は町民の意識しかないと思う。津波に対して危険な

地区に住んでいる人は意識していかないといけない。いくら消防団が頑張っても、いつ地震がくるか誰にもわからないし、自分の生活や仕事があり、消防団員は常にいるわけではない。

消防団は人を助けるといっても、自分が死んでダメだと思う。私は、新地にいたら避難広報をして、やばかったかなと思う。自ら海側の危険な所に行って広報するなんて無茶だ。しっかりした防災行政無線とか、断線しても飛ばせるような広報システムで、沿岸部には即「避難しろ！」とすることだ。

津波ハザードマップは、改めて見ると実際の浸水地と比べものにならない。ハザードマップは大切だが、基準やデータだけではわからないところがあるから、身体ひとつでとりあえず高台に逃げろというのが本当のところだと思う。高台を作り、食糧や水などのシェルターなどをそれぞれの地区に作って備蓄しておくこと。いろいろな人の意見を聞いて、最大公約数で1人でも多くの人が助かるような広報システムや演習の仕方を考えていかないといけない。自分で選択できない紙一重の運命は避けられないが、どこで地震にあっても、その場その場でいろいろなマニュアルがあると思う。

復興にかける“アイラブ新地サークル”

“アイラブ新地サークル”は、新地町の若者が作った地域のイベントやボランティア活動を通じて魅力ある新地町にしようというサークルで、平成22年の11月に発足したが、震災を予測していたわけではない。ほとんどが団員で19歳から40歳代までが参加し、私が代表を務め、同じ団員の草刈君に副代表をやってもらっている。現在会員数は42人。使命は消防団と一緒に、“町に生きる人をいかに守るか”で、生きるきっかけのひとつになればと思って作った。海辺の人は家族も家も仕事もなくし、生きる希望をなくしている人がたくさんいる。支える方法はいろいろあるので、それを



津波により見る影もない新地町大浜地区

考えていこうと。うたい文句は、10年後の未来を目指して頑張ろう。昨日も、新地町商工会青年部主催の「なんだかんだ言ったってやるしかねえべ祭り」と題した復興大音楽祭に協力して開催した復興イベントに、5,000人集まった。

瓦礫は片付けたが、景観を悪くしたくないので、秋に津波で作付けできない田畑の草刈りをしようと思っている。震災が起きたからこそ、自分たちの立ち位置がわかる。消防団員のメンバーにも共通しているのは、消防団活動に熱い人は町づくりにも熱く、人を思う気持ちがある。第3分団班長、草刈君はとても熱く、高校生と若者を2人助け、避難所で「あの髭のおっちゃんに助けられた」と感謝されたことが心に響いて自信につながり、彼の消防精神をさらに強くしたように思う。娘を自動車学校で亡くした団員がそれでも捜索活動に参加してくれた。そういう人がいるから、被災地に住んでいるけど頑張らなきゃいけないと思える。

もっと考えていければ、町の復興に一步でも近づけると思う。俺達が頑張らないといけない。“頑張っぺ 福島”だ。